

※※※※※※※※※※※※※※※※※
※ 東 南 ア ジ ア 史 学 会
※ (会報 No. 25)
※※※※※※※※※※※※※※※

昭和 50 年 7 月

東南アジア史学会会報 № 25

昭和 50 年 7 月

春季研究会報告

春季研究会は昭和 50 年 5 月 31 日(土)，上智大学 7 号館 14 階特別会議室で開催され，約 40 名の研究者が参加し，午前 10 時より午後 5 時まで活発な質疑応答をくりひろげた。本大会では会員諸氏の研究発表に加えて，東京大学教養学部吉田禎吾教授のバリ島南部サヌール村調査報告および東京大学法学政治学研究科大学院生坪井善明氏のベトナム内政問題の研究発表があり，歴史と文化を多様な側面から討議する機会を得た。発表要旨はつぎのとおりである。

ファン・ボイ・チャウと日本

白 石 昌 也

20 世紀初頭のベトナムの代表的な文紳の一人ファン・ボイ・チャウは，1905 年日露戦争のさなかの日本へ旅立って行った。そして 1908 年まで日本に滞在したあと，国外退去の措置を受けて，日本を離れて行った。本報告では彼が 1905 年の時点で，どうして日本へ旅立って行ったのかが検討される。

この問題を考察するに際しての前提条件としてまず第一に，チャウの対日関心が日露戦争の発生によって突如生じたものではなく，それ以前より中国の書籍やケン・ロ・チャクの『天下大勢論』(1892)を通じて得ていた対日知識が基盤にあったこと。そのような過程でチャウの『琉球血涙新書』(1903)の対日関心が，日露戦争に先立って表明されていたこと。そしてそう言った対日関心が，日露戦争の発生(1904)によって決定的に強められたこと。第二に，チャウの考えの裏には現実的な打算が働いていたであろうこと。そして第三に，渡日以前と以降のチャウの対日観には大きなギャップが存在していたであろうこと。をまず指摘しておきたい。

さて，ファン・ボイ・チャウをして日本に向かわしめた要因は，次の三つに分けて考えるとができよう。

東南アジア史学会会報 № 25

昭和 50 年 7 月

春季研究会報告

春季研究会は昭和 50 年 5 月 31 日(土)，上智大学 7 号館 14 階特別会議室で開催され，約 40 名の研究者が参加し，午前 10 時より午後 5 時まで活発な質疑応答をくりひろげた。本大会では会員諸氏の研究発表に加えて，東京大学教養学部吉田禎吾教授のバリ島南部サヌール村調査報告および東京大学法学政治学研究科大学院生坪井善明氏のベトナム内政問題の研究発表があり，歴史と文化を多様な側面から討議する機会を得た。発表要旨はつぎのとおりである。

ファン・ボイ・チャウと日本

白 石 昌 也

20 世紀初頭のベトナムの代表的な文紳の一人ファン・ボイ・チャウは，1905 年日露戦争のさなかの日本へ旅立って行った。そして 1908 年まで日本に滞在したあと，国外退去の措置を受けて，日本を離れて行った。本報告では彼が 1905 年の時点で，どうして日本へ旅立って行ったのかが検討される。

この問題を考察するに際しての前提条件としてまず第一に，チャウの対日関心が日露戦争の発生によって突如生じたものではなく，それ以前より中国の書籍やケン・ロ・チャクの『天下大勢論』(1892)を通じて得ていた対日知識が基盤にあったこと。そのような過程でチャウの『琉球血涙新書』(1903)の対日関心が，日露戦争に先立って表明されていたこと。そしてそう言った対日関心が，日露戦争の発生(1904)によって決定的に強められたこと。第二に，チャウの考えの裏には現実的な打算が働いていたであろうこと。そして第三に，渡日以前と以降のチャウの対日観には大きなギャップが存在していたであろうこと。をまず指摘しておきたい。

さて，ファン・ボイ・チャウをして日本に向かわしめた要因は，次の三つに分けて考えるとができよう。

第一に、彼が抱いていた弱肉強食・優勝劣敗の考え方である。これはチャウのみならず当時の憂国的文紳に共通する認識でもあった。それはベトナムの過去について、南部の古城や真臘と言った先住民族を併呑していったことを、中国の侵略軍に打ち勝ったことと共に、歴史上の輝かしい歴史として考えていたことにも如実に示される。チャウの1903年の『琉球血涙新書』も恐らくは、このような文脈の中で位置づけられるであろう。すなわち彼は弱者琉球の惨情を憐れみつつも、侵略者として日本を非難することを企図していなかったのではないか。逆にベトナムを弱者琉球と一体視することは忌避され、他方強者日本こそ目指すべきものとしていたのではないか。このような彼の願望は、1907年の『新越南』の中で、維新に成功したベトナムが近隣諸国の盟主となり、中国の同盟国となり、諸列強と対等の外交関係を結び、フランスを保護国とする、と云った強国ベトナムの未来像を描く中で、更に具体的に示されている。恐らくこういったような彼の認識方法に対しては、康有為・梁啟超たちの社会ダーウィニズムの紹介、並びに彼らの維新日本への関心が、大夫な影響と示唆を与えたことであろう。

第二に、チャウの武力革命の主張を要因として考えることができよう。彼は前世代の抗仏蜂起(19世紀末)を再興する意志を持っていたが、現状のままではフランスに大きく劣っていることを認識していた。彼においてフランスの優位は、何はともあれ武器の優位として考えられた。しかも国内では武器を調達できないと云う情況において、彼がその行き詰りの打開を求めたのは、外国からの武力援助を通じてであった。このような時にロシアと戦端を開くに至った日本が、チャウの目には彼らの要求に応じうる実力を備えた国として映じたことであろう。

第三の要因としては、彼の白色人種に対する黄色人種の団結の理念を考えることができる。しかしこの考えが渡日以前に確固たるものとして既にあったのか、渡日以降にはっきりとしたものとなつたのかは、今後の検討に待ちたい。ここでは1905年渡日直後に『大隈重信にあてた書簡』に根拠をおいて一応考察を進めたい。チャウはこの書簡の中で、日本がベトナムを救うべき理由を、第一に同文同種同洲の国であるから義理の問題として、第二に中国を狙う露仏の態度は日本にとっても脅威であると云う利害の問題(ちなみに当時の露仏両国は同盟関係にあり、またつとに三国干渉を通じて日本との利害対立に共同歩調を取っていた。)の問題として述べている。ここで注目すべきなのは、チャウがアジア主義的な團結の理念(義理)を、彼なりの国際政治に対する現実認識(利害)と相互補完的、整合的であると考えていることである。

以上のようにして、チャウは日本へ向かりことになったのであるが、実際に渡日してみると現実の日本は彼らに対してそれほど甘くはなかった。日本政府からの武力援助を得ようとする

彼の第一の期待は裏切られ、民党レベルでの援助の中で留日学生に隊列行進程度の軍事教練が施されたのがせいぜいであった。更に日仏協約後の1908年には、フランス当局の意向をおもんぱかった日本政府によって、チャウたちの組織の解散と国外追放が行なわれた。

維新以後、富国強兵の道を歩む日本は、即ち脱亜の道を歩み、白人帝国主義列強のクラブに加入せんとする若士大日本帝国に他ならなかつた。勝算のないベトナム民族運動への肩入れよりも、日本政府にとっては、国家としてのフランスとの関係の方が重要であった。そして実に日本はチャウたちの思惑に反して、仇敵であるべきはずの露仏と協商協約関係に入り、東アジアに於る利害調整をはかるに至つた。かくして救いを求めるベトナム人の願いは、日本によつて拒絶されることとなつたのである。

チャウは日本に裏切られたと感じ、「日本がもはや頼りにしえないことを知り、中華革命を専ら志向し、我々と同病の諸民族に希望を抱くようになった。」(自刊)のである。

このようにして、日本が帝国主義の一国家に他ならぬことへの認識が欠如していたこと、彼の国際政治への認識が甘かつたこと、そして外国援助に依存せんとしたことが、チャウの失望を導くに至つたのであった。

以降チャウは辛亥革命の成功した中国を志向するわけであるが、この過程では第一に、弱肉強食思想は弱者対弱者のアジア諸民族間の連帯と云う理念に置きかえられており、その現実的表現が1908年の東亜同盟会。桂越連盟会への参加、1912年の振革興亜会の結成であった。第二に武力革命による独立の達成と、それゆえの外国への依存は、その後も革命中国への期待と云う形で続いたように思われる。そして第三に革命中国とフランスの対立、とりわけ華南における利害対立が、越仏間の対立と一致すると云う現実的打算があり、そういう認識が弱者諸民族同志の連帯の理念と相互補完性をもつていたと考えられる。

ハヌヌー・マンギヤン族の宗教と社会

宮 本 勝

フィリピンは社会人類学における双系社会の研究にとって好適な地域として注目されてきてゐるが、大半の研究が機能論的分析に留まり、フィリピンの各民俗文化を全体的に把握し得る理論的視角は未だ確立されていない。本報告は、筆者が東ミンドロ州マンサライ地域で行なつたフィールドワーク(1973年-1974年: 約1年間)を通じて得られた資料に基き、Hanuno-o-Mangyan族の宗教的世界観・社会観を生活空間(集落/森)との関連で考察

彼の第一の期待は裏切られ、民党レベルでの援助の中で留日学生に隊列行進程度の軍事教練が施されたのがせいぜいであった。更に日仏協約後の1908年には、フランス当局の意向をおもんぱかった日本政府によって、チャウたちの組織の解散と国外追放が行なわれた。

維新以後、富国強兵の道を歩む日本は、即ち脱亜の道を歩み、白人帝国主義列強のクラブに加入せんとする若士大日本帝国に他ならなかつた。勝算のないベトナム民族運動への肩入れよりも、日本政府にとっては、国家としてのフランスとの関係の方が重要であった。そして実に日本はチャウたちの思惑に反して、仇敵であるべきはずの露仏と協商協約関係に入り、東アジアに於る利害調整をはかるに至つた。かくして救いを求めるベトナム人の願いは、日本によつて拒絶されることとなつたのである。

チャウは日本に裏切られたと感じ、「日本がもはや頼りにしえないことを知り、中華革命を専ら志向し、我々と同病の諸民族に希望を抱くようになった。」(自刊)のである。

このようにして、日本が帝国主義の一国家に他ならぬことへの認識が欠如していたこと、彼の国際政治への認識が甘かったこと、そして外国援助に依存せんとしたことが、チャウの失望を導くに至つたのであった。

以降チャウは辛亥革命の成功した中国を志向するわけであるが、この過程では第一に、弱肉強食思想は弱者対弱者のアジア諸民族間の連帯と云う理念に置きかえられており、その現実的表現が1908年の東亜同盟会。桂越連盟会への参加、1912年の振革興亜会の結成であった。第二に武力革命による独立の達成と、それゆえの外国への依存は、その後も革命中国への期待と云う形で続いたように思われる。そして第三に革命中国とフランスの対立、とりわけ華南における利害対立が、越仏間の対立と一致すると云う現実的打算があり、そういう認識が弱者諸民族同志の連帯の理念と相互補完性をもつていたと考えられる。

ハヌヌー・マンギヤン族の宗教と社会

宮 本 勝

フィリピンは社会人類学における双系社会の研究にとって好適な地域として注目されてきてゐるが、大半の研究が機能論的分析に留まり、フィリピンの各民俗文化を全体的に把握し得る理論的視角は未だ確立されていない。本報告は、筆者が東ミンドロ州マンサライ地域で行なつたフィールドワーク(1973年-1974年: 約1年間)を通じて得られた資料に基き、Hanuno-o-Mangyan族の宗教的世界観・社会観を生活空間(集落/森)との関連で考察

することを目的とする。

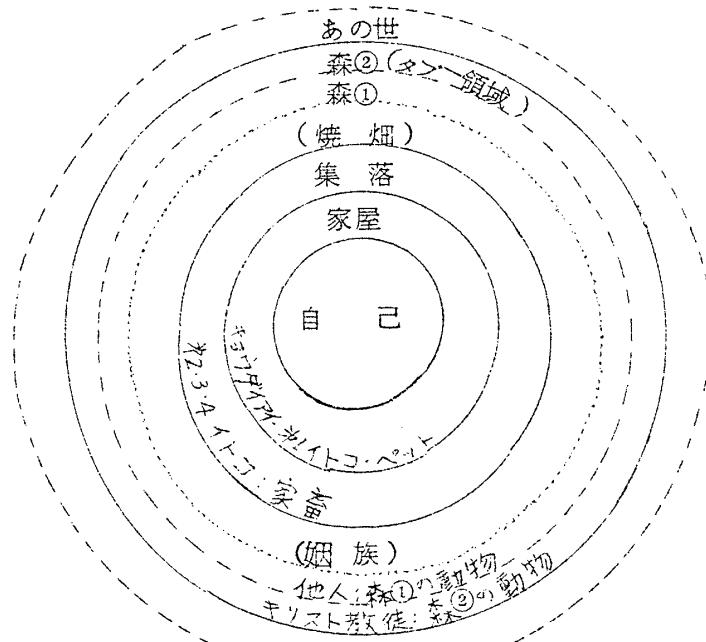
現在ミンドロ島山岳地帯には、"Mangyan" と総称され、焼畑農耕を主な生業とする原マレー系種族が7つ数えられている。考古学的研究が皆無である為、彼らの歴史的背景は明らかでないが、600～700年前に南方よりミンドロ島海岸地帯に渡り、その後同島に移住したマレー系低地民（現在のキリスト教民）によって除々に山中に追い込まれていった、と考えられている。ハヌヌー・マンギヤン族はこれら山岳民の一種族で、ミンドロ島南東部に数戸～10戸程度の家屋から成る集落（定着的）を形成して分布している（推定人口：7,000～8,000）。分布地域は約800km²と推定されているが、そのうち多くの場所が海岸地帯に住むキリスト教徒によって牧場として使用されている。キリスト教徒による土地略奪、労働搾取がかなり頗繁に行なわれてきており、彼らはハヌヌー・マンギヤン族にとって嫌悪と恐怖の対象となっている。

マンサライ地域のハヌヌー・マンギヤン族の生活空間は、基本的に、集落とそれを囲む森によって構成されている。彼らにとって、集落が生きた人間の住む日常的空間であるのに對し、その外の森は、死靈、惡靈、稻魂その他の精靈が徘徊する非日常的空間であると云える。

漠然と非日常的空間をして抱えられる森は、更に、立入り可能。焼畑耕作可能な領域とそれが禁止されている領域（タブー領域）とに2分される。祈禱師以外の人間には見ることができないが、動物や人間の姿を裝って集落の住民に病や死をもたらす惡靈（中でもキリスト教徒の姿をした惡靈が最も危険視される）が住むと考えられている場所（惡靈の森：普通複数）は立入り禁止区域とされており、そこに入れば人間は必ず死ぬと考えられている。又、特別の儀礼以外の際は、やはり森の中にある墓地や、稻魂をコントロールする精靈の宿る蟻塚にも近寄ることができず、その周辺で焼畑の活動をすることは固く禁じられている。

（彼らの信仰によれば、人間の靈魂は死後、キリスト教徒の脅威から全く隔離された死者の世界Karadwahanに移り住む。死者の世界は、稻魂の世界と同様、生者には訪れる事のできない森のかなたにあると考えられている。即ち、墓地や蟻塚は、觀念の中にある「あの世」が部分的にこの地上に置き換えられた象徴空間であると云えよう。）これらの空間領域は、彼らの民俗地理（folk-geography）のレベルで云えば、彼らにとって最も遠い領域であり、更に「この世」の一部であると同時に、それとは対立関係にある「あの世」にも屬すという両義性を帯びた空間領域であると云える。この空間領域がタブーで覆われ、儀礼的に知覚不可能な状態に置かれているがゆえに、「この世」と「あの世」の間に不連続が生じ、彼らの世界認識が成立すると解することができよう。

自由に立ち入ることができ、焼畑耕作が可能な森の空間領域を「森①」とし、タブー領域を「森②」とするならば、1人のハヌヌー・マンギャン（自己）を取り囲む世界は、《自己—集落—焼畑—森①—森②—あの世》という同心円で描かれるカテゴリー。シリーズとして把えることができる（下図参照。なお、「焼畑」のカテゴリーは「集落」と「森①」の中間にあり、「一時的集落化」と解することができる。）彼らの宗教的信仰及び儀礼から抽出される空間カテゴリーと、性と結婚に関する規制からみた人間カテゴリー、及び食事規制からみた動物カテゴリーの間にも、認識上の相関関係が見出される。



（枚数制限の為、上図の説明は、ここでは省略する）

ここで特に注目すべき点は、低地に住む「キリスト教徒」（彼らとの性関係及び結婚は禁じられている）のカテゴリーが、悪霊の宿る「森②」（立入り禁止、そこに生息する動物＝蛇。大蛇等の爬虫類は食べられない）のカテゴリーと対応している点であり、それはハヌヌー・マンギャン族の歴史的背景を考慮に入れずに理解することはできない。焼畑農耕民から森を取り去ってしまうことは、云うまでもなく、彼らの絶滅さえ意味する。前述の如く、ハヌヌー・マンギャン族は低地キリスト教徒によって土地の削減を強いられ、常に社会的・政治的圧迫を受けてきた。集落と森を基本的ステージとして展開し、統合されている彼らの世界観体系にキリスト教徒との性関係。結婚を禁止するルールが一要素として組み込まれている現象は、この弱少種族の社会にキリスト教徒勢力が婚姻を通じて侵入してくることを防ぐ上での文化的操作として理解することができよう。

[今回の研究報告は、日本民族学会第14回研究大会にて発表した内容を骨子として、更に関係資料とスライドを追加したものである。]

「タイにおける1688年の“*Révolution*” とフランス — 17世紀タイの対仏関係 についての一考察—」

飯島明子

イギリス、オランダに半世紀以上遅れて、1660年代にタイに進出したフランスは、80年代に入ると、後にルイ14世時代の一エピソードとして語られることになる、対タイ外交を開拓した。17世紀におけるタイ・フランス関係は、1687年、フランス軍がバンコク、メルギに進駐して、そのピークに達した。しかし翌88年、ルイ14世と交渉したナラーイ王(1657-88)の治世は終わり、続いて、篡奪者ベートラージャ王が即位する過程で、フランス接近政策を推進したナラーイ王の寵臣、ギリシャ人フォールコンは処刑され、フランス軍は抗戦した後、88年11月、完全に撤退し、フランス軍撤退後、タイに残留していた宣教師たちは迫害をうけた。

当時タイにおいて、自らその渦中にあった多くのヨーロッパ人が、タイにおける1688年の一連のできごとを“*Revolution*”と呼んで、その記録を残しているが、ヨーロッパ人にとってのタイ *Revolution*”は、第一に、タイの対外政策の転換—宣教師を含めたヨーロッパ人を歓迎したナラーイ王時代から、「排外」的なベートラージャ王以後のタイへの意味した。したがって、ヨーロッパ側からみたタイ史上において、“*Revolution*”は、18世紀から19世紀前半に至る、タイのいわば「鎖国」的状態の端初とみなされてきた。

小論の目的を一言で言うならば、ヨーロッパ人が呼ぶところの“*Revolution*”とは、タイにとって何を意味するか、を考察することにある。

私たちは、まず、1693年にタイのプラ・クラング(大蔵・外務大臣)がフランスへ送った書簡が、何らフランスに対する敵意を含まないことに注目し、この書簡が提供するタイ側の視点に留意しつつ、フランス人を中心とするヨーロッパ人の諸記録に基づいて、1687年9月、フランス軍がシャム湾に現われてから、翌年11月撤退するまでの1年余の間に、バンコクからロッブリーに至るタイ国中央部において展開した新国王の登位過程とその間の在タイフランス人の行動を検討する。それにより、ベートラージャ王の即位は、タイの統治機構、宗教的指導者(僧侶)を有効に利用して達成され、登位過程そのものには、フランス人を排斥する

[今回の研究報告は、日本民族学会第14回研究大会にて発表した内容を骨子として、更に関係資料とスライドを追加したものである。]

「タイにおける1688年の“*Révolution*” とフランス — 17世紀タイの対仏関係 についての一考察—」

飯島明子

イギリス、オランダに半世紀以上遅れて、1660年代にタイに進出したフランスは、80年代に入ると、後にルイ14世時代の一エピソードとして語られることになる、対タイ外交を開拓した。17世紀におけるタイ・フランス関係は、1687年、フランス軍がバンコク、メルギに進駐して、そのピークに達した。しかし翌88年、ルイ14世と交渉したナラーイ王(1657-88)の治世は終わり、続いて、篡奪者ベートラージャ王が即位する過程で、フランス接近政策を推進したナラーイ王の寵臣、ギリシャ人フォールコンは処刑され、フランス軍は抗戦した後、88年11月、完全に撤退し、フランス軍撤退後、タイに残留していた宣教師たちは迫害をうけた。

当時タイにおいて、自らその渦中にあった多くのヨーロッパ人が、タイにおける1688年の一連のできごとを“*Revolution*”と呼んで、その記録を残しているが、ヨーロッパ人にとってのタイ *Revolution*”は、第一に、タイの対外政策の転換—宣教師を含めたヨーロッパ人を歓迎したナラーイ王時代から、「排外」的なベートラージャ王以後のタイへの意味した。したがって、ヨーロッパ側からみたタイ史上において、“*Revolution*”は、18世紀から19世紀前半に至る、タイのいわば「鎖国」的状態の端初とみなされてきた。

小論の目的を一言で言うならば、ヨーロッパ人が呼ぶところの“*Revolution*”とは、タイにとって何を意味するか、を考察することにある。

私たちは、まず、1693年にタイのプラ・クラング(大蔵・外務大臣)がフランスへ送った書簡が、何らフランスに対する敵意を含まないことに注目し、この書簡が提供するタイ側の視点に留意しつつ、フランス人を中心とするヨーロッパ人の諸記録に基づいて、1687年9月、フランス軍がシャム湾に現われてから、翌年11月撤退するまでの1年余の間に、バンコクからロッブリーに至るタイ国中央部において展開した新国王の登位過程とその間の在タイフランス人の行動を検討する。それにより、ベートラージャ王の即位は、タイの統治機構、宗教的指導者(僧侶)を有効に利用して達成され、登位過程そのものには、フランス人を排斥する

[今回の研究報告は、日本民族学会第14回研究大会にて発表した内容を骨子として、更に関係資料とスライドを追加したものである。]

「タイにおける1688年の“*Révolution*” とフランス — 17世紀タイの対仏関係 についての一考察—」

飯島明子

イギリス、オランダに半世紀以上遅れて、1660年代にタイに進出したフランスは、80年代に入ると、後にルイ14世時代の一エピソードとして語られることになる、対タイ外交を開拓した。17世紀におけるタイ・フランス関係は、1687年、フランス軍がバンコク、メルギに進駐して、そのピークに達した。しかし翌88年、ルイ14世と交渉したナラーイ王(1657-88)の治世は終わり、続いて、篡奪者ベートラージャ王が即位する過程で、フランス接近政策を推進したナラーイ王の寵臣、ギリシャ人フォールコンは処刑され、フランス軍は抗戦した後、88年11月、完全に撤退し、フランス軍撤退後、タイに残留していた宣教師たちは迫害を受けた。

当時タイにおいて、自らその渦中にあった多くのヨーロッパ人が、タイにおける1688年の一連のできごとを“*Revolution*”と呼んで、その記録を残しているが、ヨーロッパ人にとってのタイ *Revolution* は、第一に、タイの対外政策の転換—宣教師を含めたヨーロッパ人を歓迎したナラーイ王時代から、「排外」的なベートラージャ王以後のタイへの意味した。したがって、ヨーロッパ側からみたタイ史上において、“*Revolution*”は、18世紀から19世紀前半に至る、タイのいわば「鎖国」的状態の端初とみなされてきた。

小論の目的を一言で言うならば、ヨーロッパ人が呼ぶところの“*Revolution*”とは、タイにとって何を意味するか、を考察することにある。

私たちは、まず、1693年にタイのプラ・クラング(大蔵・外務大臣)がフランスへ送った書簡が、何らフランスに対する敵意を含まないことに注目し、この書簡が提供するタイ側の視点に留意しつつ、フランス人を中心とするヨーロッパ人の諸記録に基づいて、1687年9月、フランス軍がシャム湾に現われてから、翌年11月撤退するまでの1年余の間に、バンコクからロッブリーに至るタイ国中央部において展開した新国王の登位過程とその間の在タイフランス人の行動を検討する。それにより、ベートラージャ王の即位は、タイの統治機構、宗教的指導者(僧侶)を有効に利用して達成され、登位過程そのものには、フランス人を排斥する

契機をもたないことがわかる。そこで、問題は、フランス人がタイ（人）とどのような形でかかわり、“*Revolution*”の過程に如何に対応したか、また逆に新しい王権を担ったタイの人々にとって、フランス人の存在が如何なる意味を持ったかを考えることになろう。

1688年、タイには、利害もタイにおける経験も異なる四つのフランス人集団があった。即ち、(1)新来のルイ14世の軍隊、(2)25年間にわたるタイにおける伝道生活を通じて、一般的のタイ人ともかなり接触していたパリ外国宣教会の宣教師たち、(3)フォールコンに対する不信感を以前から明らかにしていたフランス東インド会社員、(4)常にフォールコンの身辺にあって、王宮出入りしていたイエズス会士、の四集団がそれである。

イエズス会士は、フォールコンの失脚と同時に、タイ側に対する発言権を失なったが、残る三集団は、それぞれ、タイ側から、(1)タイ国王に仕える外国軍、(2)軍とタイ側との連絡役、(3)タイがフランスに求めた役割、即ちオランダの貿易独占状況を緩和する貿易相手国の代表、として位置づけられた。つまり、タイは、対フランス交渉において、終始、商業的利益を追求し、それは1688年においても変わりはなかったのである。

しかし、フランス人側における各集団の位置は、タイ側の与えたものとは異なっていた。フランス軍は、ルイ14世の軍隊として、他集団の優位に立ち、その行動は他のフランス人からの制約をうけなかった。したがって、フランス人内部に深刻な意見の対立はあったがフランス人側の要は、明らかに軍であった。

そのフランス軍は、タイに来た途端、タイ国内の騒動に直面し、「フランス国王の命によりタイ国王に仕える」というタイ側から与えられた任務の理解に苦しんで、著しく一貫性を欠く行動をとり、6月始めから約20日間、バンコク要塞に立て籠って、タイに無謀な攻撃をしかけた。この戦いにおいて、タイ側はオランダ人、イギリス人等の協力を得て、圧倒的に優勢であった。フランス軍は7月以降、自発的にタイからの撤退を望み、11月始め、タイから撤退用の船舶、金銭、食糧の貸与を受けて撤退した。しかし、フランス軍は撤退時に、撤退に先立つて両国間で行なわれた協定を踏み違つたため、タイに残留した宣教師たちは、協定にしたがつたタイ側の報復を忍ばねばならなかつたのである。

フランス側の記録において、軍の不名誉は「フランス軍の勇敢な戦い」と書き換えられ、また、ルイ14世の宫廷に勢力を張ったイエズス会の見解が前面に出された結果、フランスにおける“*Revolution*”理解は、ペートラージャという、キリスト教の、したがつて大王のニフランスの「敵」の存在を誇張したものとなつた。これは、ペートラージャ以後のタイを「錯国」状態とする見解につながつたであろう。

アユタヤ朝タイの「商業国家」的性格は既に指摘されているが、ナラーイ王時代の外国人受け入れ体制、それに乗じたフランスの進出も、タイの商業利潤追求という目的によって説明することができよう。しかし、フランスは、タイにおいて、経済的目的を一義的に追求したのではなかった。ルイ14世の政治的・宗教的野心がタイへ向けられたため、タイとフランスの接点は大きくズレていた。フランス東インド会社は、対タイ関係の末期に至って本腰を入れ始めたが、東インド会社の利害が、"Revolution"への現地フランス人の対応を決定するまでに撤底してはいなかつた。

フランス人は自ら望んで去り、タイの対フランス関係は解消されたが、タイは、タイに富をもたらすべき訪問者を待つて、決して国を閉ざすことはなかつたのである。

清仏戦争までのヴェトナムの内政問題 —嗣徳帝と官人・読書人層との関係を中心として—

坪井 善明

フランスがヴェトナムを本格的に侵略し始めたのは、19世紀後半からであり、1884年にはヴェトナム全土を保護国にした。当時ヴェトナムを治めていたのは阮朝四代目の皇帝、嗣徳帝（在位1848－1883）であった。この嗣徳帝を頭に置く阮朝政府は、徐々にフランスへの抵抗を弱めて行き、1883年頃には無力化していた。フランスへの抵抗は、様々な地域での在郷の読書人、官人のゲリラ戦を主たる形態とした。

本報告は、「嗣徳帝政府が何故、フランスに対して効果的な抵抗をしなかつたか、又はできなかつたか。」という設問に、特に内政問題を中心として、一つの答えを与えるようとしたものである。主要な問題点は、次の四つに要約できる。

1. [嗣徳帝の個性]嗣徳帝は、性格は穏やかで、妥協的、身体は病弱、政治より詩や学問を好んだ文人であり、儒教思想を信奉した人であった。当時の状況の中で種族的なリーダーシップを自ら取るという人であるよりも、現実に妥協して、状況に追随する傾向の多い人であった。従って、フランスの侵略という、ヴェトナム民族にとって強力なリーダーシップが必要とされた時に、嗣徳帝は、リーダーシップを制度的に發揮しうる皇帝の地位にふさわしい個性を持っていなかつた。
2. [皇位継承争い]嗣徳帝が帝位についたのは、官人間の勢力争いの結果であった。嗣徳帝は、第三代皇帝紹治帝（在位1842－1847）の二男であり、当初から後継者と目された人物ではなかつた。長男の洪保という名の、身体も健康で、かつて摄政をつとめた皇位継

アユタヤ朝タイの「商業国家」的性格は既に指摘されているが、ナラーイ王時代の外国人受け入れ体制、それに乗じたフランスの進出も、タイの商業利潤追求という目的によって説明することができよう。しかし、フランスは、タイにおいて、経済的目的を一義的に追求したのではなかった。ルイ14世の政治的・宗教的野心がタイへ向けられたため、タイとフランスの接点は大きくズレていた。フランス東インド会社は、対タイ関係の末期に至って本腰を入れ始めたが、東インド会社の利害が、"Revolution"への現地フランス人の対応を決定するまでに撤底してはいなかつた。

フランス人は自ら望んで去り、タイの対フランス関係は解消されたが、タイは、タイに富をもたらすべき訪問者を待つて、決して国を閉ざすことはなかつたのである。

清仏戦争までのヴェトナムの内政問題 —嗣徳帝と官人・読書人層との関係を中心として—

坪井 善明

フランスがヴェトナムを本格的に侵略し始めたのは、19世紀後半からであり、1884年にはヴェトナム全土を保護国にした。当時ヴェトナムを治めていたのは阮朝四代目の皇帝、嗣徳帝（在位1848－1883）であった。この嗣徳帝を頭に置く阮朝政府は、徐々にフランスへの抵抗を弱めて行き、1883年頃には無力化していた。フランスへの抵抗は、様々な地域での在郷の読書人、官人のゲリラ戦を主たる形態とした。

本報告は、「嗣徳帝政府が何故、フランスに対して効果的な抵抗をしなかつたか、又はできなかつたか。」という設問に、特に内政問題を中心として、一つの答えを与えるようとしたものである。主要な問題点は、次の四つに要約できる。

1. [嗣徳帝の個性]嗣徳帝は、性格は穏やかで、妥協的、身体は病弱、政治より詩や学問を好んだ文人であり、儒教思想を信奉した人であった。当時の状況の中で種族的なリーダーシップを自ら取るという人であるよりも、現実に妥協して、状況に追随する傾向の多い人であった。従って、フランスの侵略という、ヴェトナム民族にとって強力なリーダーシップが必要とされた時に、嗣徳帝は、リーダーシップを制度的に發揮しうる皇帝の地位にふさわしい個性を持っていなかつた。
2. [皇位継承争い]嗣徳帝が帝位についたのは、官人間の勢力争いの結果であった。嗣徳帝は、第三代皇帝紹治帝（在位1842－1847）の二男であり、当初から後継者と目された人物ではなかつた。長男の洪保という名の、身体も健康で、かつて摄政をつとめた皇位継

承予定者がいたのである。しかし、嗣徳帝の師伝をしていた高官、張登桂、阮知方が、紹治帝の遺詔を書き換えて、『高官の操作しやすい皇帝』として、嗣徳帝を帝位につかせたのである。この継承をめぐる争いは、嗣徳帝に官人総体が信従するのでなく、官人達が洪保派対嗣徳帝派という党派に分裂し、後に数回にわたって起きたクーデターの企ての遠因となった。

3. [キリスト教民] キリスト教民の存在と、政府のキリスト教民への対応策が一貫せず、曖昧であったことは、官人と在郷の読書人層の多くを、反仏、反キリスト教、反嗣徳帝の立場に追い込んだ。即ち、キリスト教民は、洪保派との関連を疑われ迫害された。(1848-1853)。1857年以後、フランスとの戦斗が行なわれている時には、内通する分子と見られ、激しく弾圧された。しかし第一次サイゴン条約(この条約の中には、キリスト教弘布の自由が含まれていた。)を批准した1863年以後、嗣徳帝政府は、キリスト教民に対する弾圧を緩めた。この為、キリスト教民と平民の争いが激化したが、嗣徳帝は、『キリスト教民を放任するのでもなく、拘束するのでもなく、安全に生活させよ。』という上諭に見られる如く、なす術がなかった。この嗣徳帝政府の曖昧な態度は、読書人層の反感を買った。第一次サイゴン条約が知れわたった1864年に、皇族の1人、洪智を中心とする反仏、反キリスト教、反嗣徳帝のクーデターが起った。更に、1866年には、洪保の遺児の丁導を頭に置く、クーデターが起った。これらはいずれも失敗した。

1875年、ガルニエ事件以後父安・河静省で、キリスト教民と読書人・官人層との争いが起こると、嗣徳帝は、交渉によってガルニエ事件を解決しようとして、明白に、キリスト教民の方に味方して、反仏、反キリスト教を掲げた読書人・官人層の運動を弾圧したのである。こうして1875年以後、嗣徳帝は、特にトンキン地方の在郷の読書人・官人層からの、信従を失うのである。

4. [中国人匪賊] 太平天国の乱による中国の混乱は、1850年代の最初から、大量の中国人流民、匪賊の侵入という形で、ベトナムに大きな影響を与えた。そして、太平天国の乱が終息した1864年以後、匪賊の質が変化した。即ち、太平天国の乱の敗残兵がベトナム政府兵の武器より優秀な武器を持って、中国と国境を接した高地トンキン地方に、組織的に侵入し、自己の勢力圏を確立しようとしたのである。嗣徳帝は、中国人匪賊に対しては、強硬な態度をとり、多くの戦費と兵力を投入し、討伐策を指示した。しかし、前線司令官は、地形、武器等の理由により、到底討伐できない事を知り、慰撫策を探る。フエにいる嗣徳帝とトンキン地方の軍務大臣黄佐炎との間に、匪賊に対する政策について争いがあり、1874年以降、黄佐炎は政府の影響力から離れ、自立化していった。このようにして、フエの嗣徳

帝政府の命令が、トンキン地方に十分に行き渡らなくなつた。

以上見たように、この主要な四つの政治的な問題の為に、国土は荒廃し、俗謡で『嗣徳帝になつてから、いいことは何もない』と歌われる様に、民衆にとっても嗣徳帝は不人気になり、多くの読書人。官人は、嗣徳帝に対する信従をやめたのである。宮廷内の官人達は、自己の勢力を伸ばす為に、嗣徳帝の後継者を誰にするか（嗣徳帝には実子がなかった。）という問題をめぐり、争いあつていた。地方の官人は政府から自立しようとしていた。このような内実の嗣徳帝政府は、フランスがベトナム全土を植民地化しようとして攻撃をかけて来た1883年には、抵抗の主体とはなり得なかつたのである。

バリ島の宗教

吉田禎吾

この報告は1974年10月から本年1月初旬にかけてバリ島南部のサヌール村を中心に行なつた文化人類学的調査に基づくものであり、ここではバリ島民の宗教の一端を述べ、とくに世界観との関連をさぐりたいと思う。

1) バリのサヌール村の中を歩くといたるところで犬に吠えられる。どこに行っても犬がうろついているほどバリ人は犬をたくさん飼っているが、これは彼らが犬好きだからではない。むしろ彼らは犬嫌いであり、犬をきたない存在であると思っているようである。

バリでは毎日各家で天界の神々に対する供物を祭壇の上にそなえ、下界の悪霊に対する供物を地面におく。悪霊に対する供物はごはんのことが多いが、これはたいてい犬が食べてしまう。下界に住む不淨な悪霊に捧げたものを食べる犬もまた、きたない存在であるという観念があるようと思われるが、さらに、バリ人の犬嫌いは、〈動物的なもの〉〈動物性〉を嫌惡することにも関連しているようである。よつ足で歩くのは動物だけであるという観念から、赤ん坊はなるべく這わせないようにし、ひとりで立って歩けるまではなるべく抱いてやるのだといわれる。双子を今でも嫌うのは動物の連想に基づくようであり、さらに男女の双子は、母の胎内で近親相姦を犯しているということから、いっそう嫌惡される。近親相姦に対する制裁として、その男女を四足で地面を這わせ、家畜に餌をやる容器から元来ブタにやる米のトギ汁を飲ませたそうである。

また、食べることも排泄と同じようにかくれて個人別々に行なうべきであるという観念があるが、これもそれが動物的行為と考えられているからにほかならない。バリの彫刻、踊り、儀礼、神話における悪魔的な存在には、動物の顔を思わせるものが多い。とくにこういう存在は

帝政府の命令が、トンキン地方に十分に行き渡らなくなつた。

以上見たように、この主要な四つの政治的な問題の為に、国土は荒廃し、俗謡で『嗣徳帝になつてから、いいことは何もない』と歌われる様に、民衆にとっても嗣徳帝は不人気になり、多くの読書人。官人は、嗣徳帝に対する信従をやめたのである。宮廷内の官人達は、自己の勢力を伸ばす為に、嗣徳帝の後継者を誰にするか（嗣徳帝には実子がなかった。）という問題をめぐり、争いあつていた。地方の官人は政府から自立しようとしていた。このような内実の嗣徳帝政府は、フランスがベトナム全土を植民地化しようとして攻撃をかけて来た1883年には、抵抗の主体とはなり得なかつたのである。

バリ島の宗教

吉田禎吾

この報告は1974年10月から本年1月初旬にかけてバリ島南部のサヌール村を中心に行なつた文化人類学的調査に基づくものであり、ここではバリ島民の宗教の一端を述べ、とくに世界観との関連をさぐりたいと思う。

1) バリのサヌール村の中を歩くといたるところで犬に吠えられる。どこに行っても犬がうろついているほどバリ人は犬をたくさん飼っているが、これは彼らが犬好きだからではない。むしろ彼らは犬嫌いであり、犬をきたない存在であると思っているようである。

バリでは毎日各家で天界の神々に対する供物を祭壇の上にそなえ、下界の悪霊に対する供物を地面におく。悪霊に対する供物はごはんのことが多いが、これはたいてい犬が食べてしまう。下界に住む不淨な悪霊に捧げたものを食べる犬もまた、きたない存在であるという観念があるようと思われるが、さらに、バリ人の犬嫌いは、〈動物的なもの〉〈動物性〉を嫌惡することにも関連しているようである。よつ足で歩くのは動物だけであるという観念から、赤ん坊はなるべく這わせないようにし、ひとりで立って歩けるまではなるべく抱いてやるのだといわれる。双子を今でも嫌うのは動物の連想に基づくようであり、さらに男女の双子は、母の胎内で近親相姦を犯しているということから、いっそう嫌惡される。近親相姦に対する制裁として、その男女を四足で地面を這わせ、家畜に餌をやる容器から元来ブタにやる米のトギ汁を飲ませたそうである。

また、食べることも排泄と同じようにかくれて個人別々に行なうべきであるという観念があるが、これもそれが動物的行為と考えられているからにほかならない。バリの彫刻、踊り、儀礼、神話における悪魔的な存在には、動物の顔を思わせるものが多い。とくにこういう存在は

キバを誇張している。バリで成年式の一種と考えられる「削歯」の儀式の目的は、門歯と犬歯を削ることにより、動物的な歯を人間的な歯ならびにするということにあるといわれる。バリの文化には、このように、動物と人間とを画然と区別し、動物的と考えられた要素を嫌い、それをできるだけ除去し、人間性を確立しようという傾向がいろいろな側面にみられる。

2) サヌールでは一般に呪術信仰が根強く存在している。数ヵ月間サヌール村長は病氣で休んでいたが、村人の噂によると、これはまじないにやられて気が違った、ということであった。一般に呪術は大きく二つに分れており、一つは penengen ともう一つは pengiwa であり、前者の「右のまじない」、後者は「左のまじない」ということである。後者は黒いまじないともいわれ、人を呪い傷つけるための呪術であるのに對して、前者は、これに對抗するための病氣の診断治療を目的とする呪術である。インドネシアの他の地域におけると同時に、右手を優越視し、左手を不淨視する思想はバリにおいても非常にきわだっており、こういう思想から呪術を左右に分けているのである。宗教にたずさわる者はサヌールにおいては、少なくとも四つのカテゴリーに分けられる。それはプダンダ (pedanda), プマンク (pemangku) バリアン (Balian), サドウグ (Sadeg) である。

プダンダはプラーマン階級

出身の祭司で、寺院の儀礼においても、各種の通過儀礼においても、とくに清めの儀式をつかさどる意味で重要な役割を演ずる。サヌール村には、男女を含め 14 人のプダンダがあり、主としてスドラ階級の祭司であるプマンクは特定の寺院を受けもち、男女ともに 60 人近くいる。バリアンはおもに民間医術や呪術によって病氣の治療を行なう呪医であり、サヌールには 10 人おり、全部男であった。バリアンは神がかりにならないのに対して、サドウグは神がかりになり、占いや病氣の診断治療を行ない、また先祖の靈をおろしてその意思を子孫に伝える巫女である。サヌールには 1 人のサドウグ (女) がいる。なおこの人はプマンクを兼ねている。

バリアンはいわゆる「右の呪術」を行ない、病氣の治療に専念すると自ら言うが、村人によると、「左の呪術」をやって人をまじないにかけるという評判のバリアンも中にはいる。バリアンには、プラーマン階級の者も、スドラ階級の者もいる。一般にバリアンは、気違いを二種に分け、一つは「左の呪術」によるもの、もう一つは先祖のたたりによるものとする。診断によって、前者か後者かを知る。

バリ語で、悪い目的の呪術にあたる言葉は「ペパンガン」(pepasangan)である。この語は、元来、悪い目的の呪術に用いる物質を指し、金、銀、銅、鉄をください、すりつぶしたもので、これを呪うべき相手の人の歩く道に埋めたりする。この言葉を聞いただけでも身の毛がよだつと青年たちも言っていた。

このブバサンガンにはいくつかの種類がある。一つは「ブバイ」(bebai)と称するもので、これは「風」として人のからだの中に鼻、口、耳などを通じてはいりこみ、その人を気違いてさせたりする。いま一つは、「タンピアス」(tampias)といわれるもので、これも「風」であるが体内に入りこまことに、からだの一部に付着し、その箇所を麻痺させたりする。第三に「チュティク」(cetik)があり、これは人によっては、ブバサンガンの中に入れずにこれと並んで人を病気にさせる方法と考えられている。これは飲食物に毒をいれる方法で、非常に恐れられている。チュティクの毒には、海に由来するもの(魚、貝、海ヘビなど)、森に由来するもの(毒草など)、山に由来するもの(いおう、火山の石など)がある。チュティクの治療には、山や森の毒にやられた者には、山や森にいる陸貝(カタツムリの一種)の油がきくといわれ、海の毒物による病人には、海の特定の貝(おうむ貝あるいはあおい貝)を揚げてその汁をとったものがよくきくという。

最も強力なチュティクは、山と海双方のものからつくった毒であると考えられているし、これを治療するための薬も、これに対応した形で、山と海のものをませたものであるといわれる。そこにバリ島民と二元論的な象徴体系の一端がうかがえる。また、チュティクの別の治療法の一つとしてバリアンは、ヤシの木の北東部になっている黄色い色の若いヤシの実の汁がきくといっている。これは、バリ南部では、北東部がよい方角、神聖な方角と考えられているからである。これは、バリ島民における山側と海側、聖と俗、善と惡といった二元的象徴体系と結びついている。この点をぬきにしてはバリの宗教を理解することはできないと思われる。

スパトラディット・ディスクン博士講演会

タイ国立芸術大学考古学部長M.C. Subhadradis Diskul博士は5月23日から2週間日本に滞在し、国際交流基金および東方学会の協力により東京および京都で講演会と懇談会を開催した。この機会に本学会は東方学会と共に公開講演会を6月2日午後6時より文部省に近い虎の門の霞山会館で開催した。Classical Arts in Thailandと題するこの講演は3世紀より近代におよぶタイ美術史の流れをスライドを使って解説したものである。通訳には本学会会員伊東照司氏が当った。なお、ディスクン博士は5月30日夕に霞山会館で東方学会主催の講演 The Date of Prasat Panom Rung in Northeastern Thailandをおこない、併せて最近のタイ考古学調査状況を報告した。

例　　会　　報　　告

第2回例会は7月5日(土)午後3時より上智大学7号館第2会議室で開催された。

泉純氏による「アジアにおける民族主義思想の形成試論」の報告の後、永積昭、白鳥芳郎、市川健二郎、山本達郎各会員より近時入手乃至読まれた文献の紹介があった。

第3回委員会報告

今秋の第15回大会についての協議を7月5日(土)午後1時より上智大学7号館で開催した。出席者：白鳥、山本、永積、市川、量の各委員

- 審議事項：1) 次期会長選出に関する選挙事務について
2) 秋季研究大会・総会について
3) 次回委員会(10月4日)の検討議題について

会誌編集委員会報告

本年度第1回委員会を5月14日午後5時より平凡社で開催し

出席者：白鳥、山本、和田、永積の各委員と平凡社吉田課長。
5号掲載用原稿の編集と校閲。

第15回大会予告

委員会で協議の結果、今秋の第15回大会をつぎのような内容で開催することになりましたのでおしらせします。個人研究発表を希望される方は9月末日までに発表要旨を学会宛にお送り下さい。

日 時：昭和50年11月1日(土)，2日(日)

場 所：上智大学7号館 14階特別会議室

日 程：第1日(11月1日)

13:00 - 17:00 個人発表

17:00 — 19:00 懇親会
第2日(11月2日)
9:00 — 12:00 シンポジウム「シユリヴィジアに関する諸問題」
13:00 — 14:00 総会
14:00 — 16:00 石井米雄氏による講演(予定)

なお、シンポジウムの発表者およびコメンティターと個人発表希望者を募ります。ご希望の方は9月末日までにお申し込みください。

会長選挙に関するおしらせ

現会長の任期2年が今秋の総会当日で満期となりますので、「東南アジア史学会役員選出規則」によって選挙を実施します。この選出規則では「選挙権及び被選挙権を有する者は会費を完納した会員とする」となっていますので、会費未納の方は早急に会費をお納め下さるようお願いします。9月に入り、選挙人登録を締切って選挙人名簿を作成し、投票用紙等の書類と共に郵送します。

10月に入り会員諸氏から郵送で会長候補者選考委員7名を選挙していただき、同委員会で会長候補者を選考します。その結果、最終的には11月2日の総会で会長を決定いたします。なお、これらの選挙事務を担当する選挙管理委員5名を「役員選出規則」にもとづいて、つきの諸氏にお願いすることになりましたので、おしらせします。

選挙管理委員：後藤乾一、伊東照司、和田正彦、青柳洋治、量博満。

第30回アジア、北アフリカ人文科学国際会議のおしらせ (旧称オリエンタリスト国際会議)

日 時：1976年8月3～8日

会 場：El Colegio de Mexico, Mexico

地域別部門：1. 西アジア、北アフリカ、2. 中央アジア、北アジア、
3. 南アジア、4. 東南アジア(Prof. José Thiago
Cintra, Centro de Estudios Orientales, El Colegio

de Mexico), 5. 東南アジア：中国、日本、朝鮮。

セミナー：Peasantry and National Integration, The World Powers and the Third World; International Relations and Development, The Army as an Agent of Social Changeなどを考慮中

コロキア：Asia and Colonial Latin America, Philosophy and Independenceなどを準備中。

公用語：英語、仏語、スペイン語。その他の言語による提出論文は翻訳を保証しない。

会員登録：アジア、北アフリカ研究者で会費40米ドルを納め、会議へ参加希望する者を会員とする。1976年1月以降の申込者に限り会費を30米ドルとする。学生割引きは目下検討中。

連絡先：The Secretary General

30 International Congress of Human Sciences in
Asia and North Africa,
El Colegio de México
Guanajuato 125
México 7, D. F.
MEXICO

東南アジア 一 歴史と文化 一 5

1975年11月中旬発行

内 容 予 告

(順不同 7月8日現在 *印は執筆中)

- | | |
|-----------|--------------------------------|
| 論 文 桜井由躬雄 | ヴェトナム中世社会の研究 |
| 鈴木恒之 | バンテン王国支配下におけるランポン地方社会の変容 |
| 泉 純 | 19世紀後半のフィリピン民族主義思想家における「民族」の意味 |
| 飯島明子 | タイ国における1688年の“Revolution”とフランス |

- 書評 * 伊東照司 『バンコック国立博物館100周年記念』
* 和田久徳 Majumdar の近著
* 森 弘之 M. Ricklefs の18世紀ジャワ史に関する著作
* 生田 滋 ポルトガル語史籍
モンスーン 白鳥芳郎, 石井米雄, *石沢良昭, *和田久徳, 永積 昭

八二四

昭和50年7月発行

発行者 東南アジア史学会
住所 〒102 東京都千代田区紀尾井町7
上智大学文学部白鳥研究室
電話 (03)265-9211 内線 257
振替 東京 59721